

# 留学生も地域の一員

## ～防災訓練と地域行事で育む顔の見える関係～

川内町内会 会長 永幡 正博さん



### 防災訓練から始まる「顔の見える関係づくり」

川内町内会が留学生との交流を始めたきっかけは、東日本大震災後の避難体制づくりにありました。この地域は学生や留学生が多かったこともあり、避難所が遠く、避難が難しい人のために、留学生が住むマンションを一時避難場所として活用したのが始まりでした。学生や留学生も炊き出しの支援を必要としており、「顔の見える関係づくりが必要だ」と実感しました。

その後、企業で就労する外国人住民も増えてきたことから、外国人住民と何か一緒にできることはないかと考え、2013年から消防署や管理会社にも協力をもらい、防災訓練を本格的に実施しました。最初は45人ほどの参加でしたが、年々増え、今では町内住民と外国人合わせて80人以上が参加します。外国人住民が増えるなかで、「言葉が通じない」「ルールが分からない」といった不安を互いに減らすために、防災訓練が交流の第一歩となりました。

### 翻訳アプリの活用で言葉の壁もクリア

防災訓練では、消火器の使い方やAEDの操作、応急処置の仕方などを一緒に体験しています。言葉の壁は、やさしい日本語を使うようにしたり、翻訳アプリを活用して乗り越えています。防災訓練を初めて体験する外国人も多く、緊張しながらも楽しそうに取り組む姿が印象的でした。

また、訓練の後には、ゲーム大会などお楽しみ会を行っています。同じ行事の場を共有することで、留学生もリアルな日本語を学べ、自然に交流できる場が生まれていきました。



### イベントでの多文化交流・深まる絆

イベントの案内は町内会で英語翻訳ができる住民と協力して英語版チラシを作成し配布。文化の違いを尊重しながら、誰もが参加しやすい工夫を続けています。七夕まつりでは住民が留学生の浴衣の着付けを手伝ったり、秋祭りや正月に餅つき大会を行ったりするなど年間を通じて多くのイベントを開催し、交流が定着してきています。参加は強制していませんが、イベントの楽しさを留学生同士が口コミで伝えてくれ、参加者数も増えています。

こうした積み重ねにより、「外国人がいるのが当たり前」という空気が町内に生まれ、こどもたちが自然と「ハロー」と声をかける姿をよく見かけるようになりました。

### 継続と声かけがつくる安全・安心なまち

町内会では、生活ルールや安全面でも工夫を凝らしています。地域特有のルールがわからないのは日本人も外国人も同じなので、わかるように説明することが大事。そこで、ごみ出しや自転車マナーの注意喚起を翻訳したチラシを作成しポスティングしたり、新しく入居した学生や留学生に向けて多言語版の説明書や仙台市指定のごみ袋を見本として配布したりしました。文化や価値観は違っても、同じ地域で暮らす仲間として寄り添い合うことが大事なのだと感じています。

他の町内会へのメッセージとしては、まずは声かけと継続が大事。そして、コミュニケーションが地域の安全・安心につながっていきます。外国人も地域住民も、互いに顔が見える環境を築く、それが、川内町内会の目指す“誰もが安心して暮らせるまち”の形です。



# 老若男女が得意分野を持ち寄って ～小さなサロンの雑談から地域の課題解決～

高砂北上町内会 会長 杉崎 博子さん



## 女性リーダー育成プログラムで得た気づきと 地域への想い

会長を引き受ける前年、役員選考委員になり、前会長が次の引き受け手がないことで苦労されていたのを見て、なんとかしなければという思いで会長職を引き継ぎました。会長を引き受けてすぐ前会長がお亡くなりになり、すべて手探りで前年度踏襲からのスタートでした。

そんな中で別の町内会の女性の会長の勧めで参加した、仙台市主催の女性リーダー育成プログラム「決める・動く」が転機となりました。参加者が地域でどんな活動をしているかを学ぶことで、町内会を活性化するために、何かをしなければという想いが芽生えました。そうして、まず、立ち上げたのが地域の人々が気軽に集える「サロン」でした。

## 肩の力を抜いて、まずは“サロン”から

サロンは、近隣住民が顔を合わせて、おしゃべりしたり、裁縫を楽しんだり、つながりを深める場として月2回開催しています。町内の松寿会（高齢者クラブ）と協力して実施することとしました。毎回10人ほどが集まりにぎやかに会話を楽しみます。「特に目的がなく集まる」という発想を意外に思う方もいるかもしれませんが、それが大事でした。意図していなかった良いことがたくさんありました。まず、お互いが元気で暮らしているか「生存確認」ができます。また、雑談での情報交換から町内の課題に気づき、解決のための協力者が見つかることもありました。裁縫サロンは、何を作るか軌道に乗るまで試行錯誤をしましたが、得意な方が先生役となり、2、3回で出来上がる壁掛け等の小物作りで落ち着きました。作品を町内のバザーで販売することもできました。



## コミュニティづくりは小さい輪から

サロンは本当に簡単で、「やる」って言えばいいだけでした。1人2人賛同してくれる人がいれば輪は広がります。あまり構えず、まずは毎月みんなが気軽に集って、賑やかにおしゃべりできる場づくりが活動の最初の一步でした。

## 世代を超えて関わり、支え合う場づくり

次に考えたのが、こどもや若い世代を含めた活動でした。北上ふれあい広場というお祭りを企画しました。集会所で、芋煮や焼きそばをつくり、ゲーム等ができる行事を実行しました。サロンに集まったメンバーもバザー等に協力してくれました。なかなか人が集まりませんが、3年目となった今年は天候にも恵まれ、多くのこどもたちやお父さん、お母さん、これまでの親睦会等に参加されなかった方たちも来てくれました。内容は、まだまだ工夫していかなければなりませんが、様々な世代の方の交流の場にしていきたいと思います。

町内会の運営で大切にしているのは、「情報の共有」と「誰もが関われる仕組み」です。毎月の回覧では、情報を整理し、分かりやすく伝えることを意識しています。また、仕事を持っている方も役員として関われるよう、役員会・班長会ではレジュメをつくりスムーズな進行になるよう努めています。

町内会は地域を支える大切な組織です。役員の担い手不足や住民の高齢化、町内の公園と旧用水路の清掃の負担の大きさ等多くの課題はありますが、サロンやふれあい広場など“顔の見える関係づくり”を大切にしながら、一つ一つの課題に取り組んでいきたいと思います。



# 学生ボランティアが地域に笑顔を ～行事をけん引する学生、つなぎ支える町内会～

荒町地区連合町内会      会 長 武川 由美子さん



## こども食堂が交流の場、学びの場に

「親御さんの仕事が忙しくこどもたちだけでご飯を食べることも多い」という話を耳にし、連合町内会と社会福祉協議会で9年前にこども食堂「すまいる食堂」を始めました。最初はこどもだけの参加でしたが、親御さんや高齢者の参加も増えてきて、みなさんの『おいしい』という言葉が嬉しく、活動の励みになっています。

東北学院大学が移転してきた縁もあり、学生が会場設営や調理など運営スタッフとして参加してくれています。彼らもコロナ禍でボランティア活動ができず、活動の場を探していたようです。また、学生自身もこの活動を通して「家庭的なご飯を食べられた」「料理を覚えて家で作った」と喜びを口にするなど、食堂は参加するみんなにとって貴重な場となっています。

## 大学生のサポートで学習支援も実現

食堂をする中で、親御さんから「時間がなく子どもの勉強を見てあげられない」「塾に通わせるのが難しい」という悩みを聞くようになったのですが、私自身も以前から学習支援をしたいと考えていたので、「この機会にやってみよう」と決意し、大学生に相談したところ、お手伝いいただけると言ってもらえたので、冬休みや夏休みに小学生の学習支援にも取り組むことになりました。この活動をきっかけに勉強に興味を持つこどもも増え、親御さんも私たちも「やってよかったな」と喜んでいます。

## 世代を超えた交流で生まれる「助け合い」

すまいる食堂では、世代を超えた交流の中で、自然に「助け合い」が生まれています。例えば、箸を落とした

お年寄りに箸を持って行ってあげたり、みかんが足りない人に気づいて持って行ってあげたり、大人や先輩たちがやっていることを間近に見て、場を共にすることで、こどもたちは自然とボランティア精神を育み、大人たちは支え合いの安心感を得ているのです。

また、五橋中学校の生徒がボランティアに参加するようになったことも大きな変化です。浅漬け作りと一緒に学んだり、困った仲間を励ましたりと、こども同士の思いやりも育まれ、世代を超えた場所になっていることが何より嬉しいですね。中学生の十八番（おはこ）の浅漬けは大好評です。

## 地域と学生の力で広がる可能性

以前は会場設営が大変でしたが、今は学生が率先して動いてくれるので、とても頼もしく助かっています。11～3月に実施するナイトパトロール（地域を歩いて見回り防犯防災を呼び掛ける）への参加も学生から提案があり、一緒に活動しています。彼らは隅々までとても丁寧に見まわってくれるので、とても頼りにしています。

さらに、大学の地域連携課や社会福祉協議会のサポートがあることで、円滑な運営が実現しています。成果は地域のいたる場面で感じられます。街で「この間食堂で会ったね」とこどもに声をかけられたり、高齢者が「孫になりたい」と参加した子どもに言われて明るくなったりと、心温まるエピソードが絶えません。こどもや住民が安心して過ごし、人とつながれることをとても大切にしています。いつか学生やこどもたちが地域活動の担い手になってくれたら嬉しいし、私たち自身も「健康で頑張らなくちゃ」と、活動に対してのモチベーションアップにもなっています。



# 食を通じて人がつながる

## ～地域と大学が協働で築く、高齢者のいきいき活動～

人来田学区連合町内会 会長 小本 一次さん



### 大学との協働で広がる学びと支え合い

人来田学区は、5つの町内会が参加する連合町内会です。それぞれの活動を進めながら、地域の高齢化やコミュニケーション不足など地域の課題解決に向け、さまざまな取組を進め、少しずつ効果を挙げています。

そうした活動の重要なパートナーが、地域にキャンパスがある宮城大学食産業学群の作田教授と学生のみなさんです。卒業研究で「買い物弱者」について調査する中で、町内会の状況を知りたいとお話をいただき、地域でも以前あったスーパーマーケットがなくなったり、高齢のため免許返納される方が増えたりなど、買い物で困っている方も多かったためご協力することにしました。そんなやりとりをきっかけに、「課題解決のために一緒にできることがあるのでは」という流れが自然に生まれました。

### 今までにないアイデアで企画の幅が広がった

食を通じた交流の場「お茶っこのみを推進する会（お茶っこ会）」を実施したり、学生の得意分野を生かして「スマホ教室」も開催したりしました。最初は不安そうだった高齢者のみなさんもスマートフォンの使い方を覚えるだけではなく、学生さんとのおしゃべりを楽しみにするようになりました。

学生さんは我々だけでは出ないアイデアや魅力ある企画を考えてくれるので地域の活気が出て、みなさん楽しみにしています。作田教授からは「学生が幅広い世代と話せる貴重な機会。色々な話を聞けるのを喜んでいます。『人』が魅力なんです」と言っていたので、大変感謝しております。

### 食やおしゃべりで生まれた地域のつながり

高齢化が進む人来田学区では、一人暮らしの高齢者も多く、「お茶っこ会」はみなさんの暮らしぶりを確認する意味でも大事な役割を果たしているのですが、全員が参加できるわけではありません。そこで無理なく、ゆるやかに「見守り」ができる取組として、連合町内会の防災訓練の際に、みんなで歩いて危険な場所をチェックする合間に、地域のこどもたちが一人暮らしのお宅を訪問し、おしゃべりできる機会やバーベキューをみんなで行うなど交流の機会も設けています。

また、公園でコーヒーを飲みながらおしゃべりする「公園カフェ」も気軽に参加できると人気で、普段、カフェに行けない子育て中のお母さんたちにも好評で、取組は多世代に広がってきています。これらも、学生さんと連合町内会とで相談しながら始めた取組です。

### 新たなリクエストが続く力に

人来田小学校のブラスバンド部は部活動の地域移管を受け、親の会がサポートしており、連合町内会では冷暖房完備の施設を練習場所として開放しています。宮城大学は吹奏楽部などのサークルがないことから、思うように演奏活動ができない学生もいるということで、お声がけし一緒に練習できるようにしました。小学生は大学生と練習することで刺激になり、大学生は楽器を借りて練習する場を得ました。交流が広がるにつれ、若い世代の関心も集まり、「地域の趣味サークルに参加したい」「郷土料理を習いたい」など新しいリクエストも出ています。地域の合言葉は「まずはやってみよう」。ピンチはチャンス。地域と大学が協力し、知恵を出し合えば良いアイデアが生まれる、そんな流れが私たちの強みだと思います。



# それぞれの持ち味を活かして

## ～みんなで話し合い、無理なく続ける町内会運営～

市名坂東町内会 会長 草 貴子さん



### 女性役員が担う町内会運営

市名坂東町内会は、新興住宅地内の町内会として、平成20年4月1日から運営が開始されました。現役世代が多く、町内会運営に参加できる人が少ない中、「できる人でやりましょう。」と声を掛けたところ、たまたま集まったのが女性の方々でした。女性ならではの視点を盛り込みながら、令和4年まで15年ほど、女性役員のみで町内会を運営してきました。

### 無理のない柔軟な運営を目指して

役員会は月1回、月末の木曜日19時から開催し、30～60分で必ず終わらせます。それぞれの事情で毎回2～3名程度の欠席者がいますが、役員会で決まったことは役員全員に伝わるようにしています。

企画立案・事務作業・力仕事など町内会運営に必要な仕事は、それぞれの得意分野が生かせるように役割を分担しています。「家庭が第一」なので、介護や受験等の諸事情により年度途中で欠員となった場合も補充せず、次期改選まで空席としています。

このように一人ひとりの負担を軽減し、ライフスタイルの変化に合わせることで無理のない、柔軟な町内会運営ができていると思います。

### 町内会が女性活躍の場へ仲間と共に楽しく活動

町内会役員という「役割」と「場所」があることで、女性たちは力を発揮しています。

家族を支える立場から、「地域をより良くしたい」という仲間と共に、地域の人々を支える町内会役員となり、経験を積んだことで自ら発言し、積極的に行動できるようになってきました。

特に、防災への取組には、女性ならではの視点を取り入れました。もともとこの地域には集会所がなく、人が集まる場所がほしいという声があったことから、会員に

アンケート調査を行い、平成22年に建設しました。設計の段階から災害時を想定し、知恵を出し合いました。例えば、女性でも手が届く災害用備蓄棚や大収納のロフトを設け、毛布や布団を置くなど、災害時に迅速に対応できるように工夫しています。明るく暖かい場所になるようにオレンジ系の内装や滑らない床材を選び、IHの対面キッチンや収納付きベンチを設置。トイレは障害のある方も使いやすいよう多目的用を含め2つ作るなど、日常的にも使いやすい集会所を実現しました。

柔軟に発言し、行動することがとても大切。それが持続可能な運営につながっているし、役員の枠を超えた交流を育んでいると思います。

### 若い子育て世代を応援 子育て支援活動「ずんだっこ」

集会所は地域の人が集まる場です。高齢者、障害者だけでなく地域で子育てしている若い世代にも大事な拠点です。東日本大震災後、若い親御さんから「小さな子どもと一緒に集まる場所を作ってください。」と申し出があり、平成23年11月から週1回、集会所を開放して子育て支援「ずんだっこ」を始めました。絵本、おもちゃがあるのもこの集会所の特徴で、口コミで広まり、年間500名が利用しています。

主に節分の豆まきやクリスマス会等を開催しており、若い親御さん同士の情報交換の場であると同時に、イベントを通して役員と関わることで、地域に顔の見える関係ができ、地域行事への参加のきっかけにもなっています。

### 町内会運営に新しい風をと課題提案を発信

町内会運営に多様な視点を取り入れるため、令和5年より男性が役員に就任しました。女性と男性は発想が違うので、お互いに意見を出し、得意分野を連携し共有していくことで「なるほど!」という発見もあり、より視野が広がるのではと期待しています。

